

テレビニュースにおける言語現象について

轟 里香\*

On Linguistic Phenomena in TV News Programs

Rika Todoroki\*

# テレビニュースにおける言語現象について

轟 里香\*

## On Linguistic Phenomena in TV News Programs

Rika Todoroki\*

*Received December 8, 2014*

### Abstract

This paper is an analysis of sentences which appear in Japanese TV news programs. A lot of sentences used in news programs lack important information. Some of those sentences do not have their predicates. Others lack one or more arguments to which the verb needs to assign  $\theta$ -roles and thus violate syntactic rules. In some cases, the first sentence of one news story lacks important information, which is revealed in the following context gradually. In other words, some of the most important points are moved rightward in the discourse.

This paper examines the linguistic phenomena and how the missing information is revealed in the news stories. I show that various forms of signs (spoken and written words, aural and visual images, etc.) are used to reveal the missing information in the context. Furthermore, I refer to an example in 1970s and try to show how the linguistic phenomena developed. In the earlier case, the first sentence has all the grammatically required elements but does not state the theme of the story. Starting with cases like this, the linguistic phenomena (moving important points rightward) seem to have developed and led to sentences which lack grammatically required elements.

### 1. 導入

日本のニュース番組<sup>1</sup>で用いられる言語には、従来見られなかったような現象が見られる。その中に、文の要点や必須の要素を後ろのほうに動かしたり省略したりする現象がある。轟 (2007) はこのような言語現象を「要点の後置・省略」と呼んでいる。轟 (2013) は、「要点の後置・省略」にいくつかのタイプがあることを指摘し、後ろに動かされたり省略されたりした部分の情報が、どのような形で補われるか (あるいは補われないか) という点で3つのパターンに分類できることを示した。

本論文は、轟 (2007, 2013) に基づき、ニュースに出現する「要点の後置・省略」のタイプの違いを示す。そして、そのようなタイプの違いと、後ろに動かされたり省略されたりした部分の情報の補われ方との関連を示す。さらに、それらのタイプの中で、歴史的に見て最も早く

---

\*未来創造学部 School of Future Learning

出現したものはどれかを明らかにする。そして、「要点の後置・省略」がどのように発展していったかを考察する。

本論文の構成は次のようなものである。2 節では、タイプの異なる「要点の後置・省略」を示し、3 節では、それらのタイプと音声言語で省略された情報の補足の仕方の関連を示す。4 節では、談話の構造として行われるタイプの「要点の後置・省略」において、省略された情報がどのように明らかにされていくかを分析する。5 節では、「要点の後置・省略」のタイプとその情報の補足の仕方のうち、歴史的に最も早く出現したと思われるものを見る。そして、そこから「要点の後置・省略」がどのように発展していったかを考察する。6 節では、本論文のまとめを行う。

## 2. 「要点の後置・省略」の種類

この節では、轟 (2013) に基づき、タイプの異なる「要点の後置・省略」が存在することを示す。

### 2.1 単文の述部の省略

ニュースで用いられる単文の中には、文法的に必須の要素である述部が完全に省略されている文がある。

- (1) a. 民主党の対案の提案に対し、与党は。  
b. 一方他の野党からは。  
c. 福田総理大臣は。

(「ニュースウォッチ 9」NHK、2007 年 12 月 21 日放送<sup>2</sup>、轟 2008:125)

- (2) 専門家は。

(「ニュース 7」NHK、2013 年 11 月 17 日放送、轟 2013:170)

- (3) a. 閣僚や自民党内からも。  
b. 鈴木議員は自らの進退について。  
c. これに対して地元の町長は。  
d. さらに黒幕説も。

(「ニュースウォッチ 9」NHK、2014 年 6 月 23 日放送)

- (4) a. 容疑者の逮捕に住民たちは。  
b. 引っ越す予定だった新築のアパートが火事になり、その後入居した女性は。

(「ニュース 7」NHK、2014 年 12 月 1 日放送)

2014 年 6 月 23 日放送の「ニュースウォッチ 9」では、放送時間約 1 時間中、このタイプの文の出現が 11 回あった。このことから、近年のニュースでは、日常化しているタイプの文であることが分かる。

### 2.2 単文中で必須の要素の省略

次の (5) から (13) では、(1) から (4) とは違って述部は存在するものの、文の様々な要

素が省略されている。

- (5) ほぼ4年3ヶ月ぶりの復活です。  
(「ニュース7」NHK、2010年10月5日放送、轟 2010:102)
- (6) 我が家でも飼っています。  
(「ニュース7」NHK、2011年6月24日放送、轟 2013:170)
- (7) 願いをかなえる研修会です。  
(「ニュース7」NHK、2011年11月12日放送、轟 2011:4)
- (8) 700万円払った部下もいました。  
(「ニュースウォッチ9」NHK、2007年12月21日放送、轟 2008:125)
- (9) 洪水の被害はいつまで続くのでしょうか。  
(「ニュース7」NHK、2011年11月12日放送、轟 2011:5)
- (10) 早くも梅雨入りです。  
(「ニュース7」NHK、2013年5月27日放送、轟 2013:170)
- (11) 中国でも人気です。  
(「ニュース7」NHK、2014年11月28日放送)
- (12) むしゃくしゃしてやった。  
(「ニュース7」NHK、2014年12月1日放送)
- (13) 雪の中、暖房の効かない列車に8時間近く閉じ込められました。  
(「ニュース7」NHK、2014年12月3日放送)

これらの文は、文法的基準を破っている。例えば、Chomsky (1981) で提案された  $\theta$  基準では、項と意味役割は一対一対応の関係になければならず、いかなる項にも付与されない意味役割が存在することは禁じられている。次の (14) (15) は  $\theta$  基準を破っている例である。

- (14) \*John put on the table. (中村、他 1989:77)  
(15) \*ジョンはテーブルの上に置いた。(轟 2013:170)

(14) では、動詞 put がもつ意味役割の一つである Theme が付与されるべき項がない。同じように、(15) でも、動詞「置く」がもつ意味役割の一つが付与されるべき項がない。したがって、(14) (15) は  $\theta$  基準違反となる。

このように文法的基準に違反した文が、ニュースにおいて出現している。例えば、(6) では、動詞「飼う」の目的語が省略されることによって、「飼う」の目的語に付与される意味役割に対応する項が存在しないことになる。

また、(7) (8) にある「願い」「部下」などの名詞は、初出時には「だれの」を表す情報を必要とする<sup>3</sup>が、(7) (8) ではそれらが省略されている。

従来ニュースで必要とされていた「いつ」「どこで」などの情報 (いわゆる 5W1H に属する情報) が省略されている場合もある。例えば、(10) では、「どこで」梅雨入りしたのかが省略されている。

これらの単文の中には、コンテキストがあれば可能な文もある。

- (16) (cf. (11)) 漫画は世界中で多くの人に読まれています。Φ中国でも人気です。

(16) の第二文は、音形のない主語を持つと解釈できる。

しかし、(5) から (13) の文はいずれも、そのニュース項目での冒頭の文である。したがっ

て、音形のない項を持つとは解釈できず、これらの文では、重要な情報が省略されていることになる。

このように、単文で必須の要素が省略されている例がニュースでしばしば見られる。

## 2.3 談話の構造としての要点後置

要点の後置は、談話の構造として行われる場合がある。そのような場合、そのニュース項目の中で最も重要な情報を表す文が、第二文以降に置かれる。以下の例を見てみよう。

- (17) a. 国内最大の百貨店グループが誕生します。大手百貨店の三越と伊勢丹は、来年4月に経営統合することを正式に発表しました。  
b. 夢の電池登場となるのでしょうか。バイオ電池なるものが開発されました。  
(「イブニングニュース」TBS、2007年8月23日放送、轟 2007:129)
- (18) 県特産物を守ろうとみんなが力を合わせます。農協や農家が結成したパトロール隊。守ろうとしているのは秋の味覚 20 世紀梨です。鳥取県佐治町では、毎年収穫直前の梨が盗まれていることから、今年パトロール隊を結成しました。  
(「ニュース7」NHK、2007年8月23日放送、ibid., 129)
- (19) 検察への信頼を根底から揺るがす事態です。厚生労働省の元局長が無罪判決を受けた事件。大阪地検特捜部の主任検事が押収したフロッピーディスクのデータを改ざんした疑いがあることが分かり、最高検察庁が捜査を始めました。  
(「ニュース7」NHK、2010年9月21日放送、轟 2010:102)
- (20) 洪水の被害はいつまで続くのでしょうか。タイは、満潮のときの潮位が特に高くなる大潮を再び迎えました。被害が長期化する中、タイのスラボン外相と会談した玄葉外務大臣は、日系企業の操業を早期に再開させるため、タイ政府の協力を要請しました。  
(「ニュース7」NHK、2011年11月12日放送、轟 2011:5)
- (21) さあ、大型連休最終日の今日、大きな事故につながりかねないトラブルが起きました。ご覧の映像は、大分空港を離陸し、大阪に向かう日本航空の小型ジェット機。この旅客機が、大阪空港着陸直後にエンジン火災を起こしました。  
(「ニュースウォッチ9」NHK、2013年5月6日放送、轟 2013:171)
- (22) では、次です。巨大な自動車運搬船が関係した可能性が出てきました。こちら、きのう宮城県沖で発見されたマグロ漁船の船首部分です。船長は今も行方不明のままです。当時現場海域を外国船籍の自動車運搬船が航行していたことが分かり、海上保安本部が詳しい状況を調べています。宮城県金華山の沖合 300 キロ。浮かんでいるのは、2 つに割れた漁船。その船首部分です。さらに、離れたところには、沈没しかかった船尾部分。高知県須崎市のまぐろはえ縄漁船、第七勇仁丸が 2 つに割れていました。きのう午前 10 時過ぎ、遭難信号を発信。船長の義澤宏志さんが行方不明となっています。海上保安本部によりますと、救助された乗組員は、自分たちの漁船に大きな船が衝突してきたと話しているということです。  
(「ニュースウォッチ9」NHK、2013年6月24日放送、ibid.,171)

このような談話における冒頭の文では、前節で述べた、統語的に必須の要素やいわゆる 5W1H に属する情報の一部が省略されている場合が多い。(20) はそのような例である。(20) の第一文は、(9) であり、「どこで」という情報が省略されている。

次の (23) では、一度述べたことを後で否定するという形をとっている。

(23) 名刺を交換するサラリーマンたち。臨んだのは、商談・・・ではなく、巨大地震を想定した訓練です。

(「ニュース 7」NHK、2013年6月22日放送、ibid.,172)

このような例は、要点を省略して後で述べるということがさらに進んだ形と考えられる。

ここまで挙げた談話例のうち、(18)はこのニュース番組(「ニュース 7」)の最後に放送されたものである。この番組では、2014年現在まで、このような構成を取る談話が一つのコーナーのようになっている。このコーナーでは、談話の冒頭文において必須要素が省略されており、これをアナウンサーがまず発話し、その後ニュース映像が流される、という構成をとっている。

このように、談話の構造として要点が後置される場合がしばしば見られる。このような談話の構造を、文学作品でとられる構造と比較することができる。次の文章を見てみよう。これは、2013年の芥川賞を受賞した小説『爪と目』に関するものである。

受賞作「爪と目」は、妻を亡くした男性と同居を始めた愛人と、亡くなった妻の幼い娘との間に漂う、不穏な緊張感を描いた物語。受賞時、書き出しの一文が話題をさらった。「はじめてあなたと関係を持った日、帰り際になって父は『君とは結婚できない』と言った」――思わず読み直してしまうような違和感は、「わたしは三歳の女の子だった」という説明で「娘が語り手なのか」と解消されるけれど、怖いのはそこから。幼い「わたし」が年上の「あなた」の行動を淡々とつづる文章は、愛人が常に娘から監視されているような不気味な錯覚を生み、その先に壮絶なラストシーンが待ち受ける。

(「どう書くか 沈黙の1年」朝日新聞2013年11月30日、下線は筆者、ibid.,172)

この文によれば、この小説の書き出しの一文は、「思わず読み直してしまうような違和感」を生んでいる。それが、その後の説明で「解消される」という構造になっている。

小説とテレビニュースでは、文字言語と音声言語という違いはあるが、この小説でとられている上のような構造と、ニュースの音声言語でしばしばとられている構造は、類似している。このことを具体的に見てみよう。この小説の書き出しの文すなわち第一文は、「違和感」を生むと述べられているが、これは必須要素の省略を含んでいるためである。ここで省略されている要素の一つとして、「父」がだれの「父」なのかという情報がある。一方、次の(24)はニュースの第一文であるが、「部下」がだれの「部下」なのかという情報が省略されている。この第一文とそれに続く部分を(25)に示す。

(24) (= (8)) 700万円払った部下もいました。

(25) 700万円払った部下もいました。神奈川県警察本部の警視が関与した疑いが出ている靈感商法事件で、この警視は、部下の警察官を靈感商法が行われていたサロンに勧誘したり、投資話を持ちかけて金を集めていたことがわかりました。

(ibid.,172)

(25)を見ると、第一文で省略されている、「部下」がだれの「部下」なのかという情報が、その後次第に明らかにされていくという構造になっていることがわかる。一方、上に述べた小説では、第一文で省略されている「父」がだれの「父」なのかという情報が、続く説明で明らかにされていくという構造になっている。したがって、これらのニュースと小説両方で取られている構造は非常に類似していると言える。

要点が次第に明らかにされていくという構造を、もう少し長い例で見よう。

(26) (= (22)) では、次です。巨大な自動車運搬船が関係した可能性が出てきました。こちら、きのう宮城県沖で発見されたマグロ漁船の船首部分です。船長は今も行方不明のままです。当時現場海域を外国船籍の自動車運搬船が航行していたことが分かり、海上保安本部が詳しい状況を調べています。宮城県金華山の沖合 300 キロ。浮かんでいるのは、2 つに割れた漁船。その船首部分です。さらに、離れたところには、沈没しかかった船尾部分。高知県須崎市のまぐろはえ縄漁船、第七勇仁丸が 2 つに割れていました。きのう午前 10 時過ぎ、遭難信号を発信。船長の義澤宏志さんが行方不明となっています。海上保安本部によりますと、救助された乗組員は、自分たちの漁船に大きな船が衝突してきたと話しているということです。

このニュースは、これが放送された前日に起こった事件に関連したものであるが、その事件は、新聞の報道によれば、次のようなものである。

(27) 23 日午後 1 時ごろ、宮城県金華山の南東約 300 ㌾の沖合で、海上保安庁の航空機が、船体が 2 つに割れて転覆している高知県須崎市のマグロはえ縄漁船、第 7 勇仁丸 (19 トン、乗組員 9 人) を発見した。第 2 管区海上保安本部 (宮城県塩釜市) によると、船長の義沢宏志さん<sup>5</sup> (52) が行方不明になっている。大型船と衝突したとの証言があり、船の行方を調べている。  
(「漁船転覆、船長が不明」朝日新聞 (東京) 2013 年 6 月 24 日夕刊 15 面、ibid.,178)

(26) で (27) の第一文にあるのと同じ情報が現れている部分に下線を付すと、以下のようになる。

(28) では、次です。巨大な自動車運搬船が関係した可能性が出てきました。こちら、きのう宮城県沖で発見されたマグロ漁船の船首部分です。船長は今も行方不明のままです。当時現場海域を外国船籍の自動車運搬船が航行していたことが分かり、海上保安本部が詳しい状況を調べています。宮城県金華山の沖合 300 キロ。浮かんでいるのは、2 つに割れた漁船。その船首部分です。さらに、離れたところには、沈没しかかった船尾部分。高知県須崎市のまぐろはえ縄漁船、第七勇仁丸が 2 つに割れていました。きのう午前 10 時過ぎ、遭難信号を発信。船長の義澤宏志さんが行方不明となっています。海上保安本部によりますと、救助された乗組員は、自分たちの漁船に大きな船が衝突してきたと話しているということです。

(ibid.,178)

(28) を見ると、音声言語の第一文で省略された情報が、第二文以降で述べられている。しかし、下線部を見ると、まとまった文の形ではなく、談話全体に散らばっている。このことから、第一文で省略された情報は、第二文以降でもまとまった文の形で述べられるのではなく、断片的な形で少しずつ述べられていることがわかる。

ここまで見た例では、それぞれのニュース項目の第一文において、統語的に必須の要素やいわゆる 5W1H に属する情報の一部が省略されている。これに対し、純粋に構造的に要点の後置になっている場合がある。

(29) タオル産業が盛んな愛媛県今治市。佐賀県特産の陶磁器の有田焼。そして香川県名物のさぬきうどん。いずれも、地名や特産品の名前が中国で勝手に商標として出願されたり、

登録されたりしたことから、地元の自治体などが登録の阻止や取り消しを求めるなどの対応を迫られました。無関係な第三者が海外で勝手に商品登録をするこうした悪意の商品出願。その対策などについて話し合う国際会議が今日から東京で始まりました。

(「ニュース 7」NHK、2014年12月3日放送)

(29) の冒頭には必須の要素を省くような文は出現していない<sup>6</sup>。しかし、談話の構造としてみると、何のニュースなのかがなかなか分からないような構造になっている。

### 3. 音声言語で省略された情報の補足

この節では、音声言語で省略された情報の補足が行われるかどうか、行われる場合、どのように行われるかを見る。

テレビニュースは、言語だけではなくその他の様々な記号で成り立っている。また、言語にもアナウンサーの語りのような音声言語と画面上に文字の形で現れる言語がある。それで、音声言語に省略がある場合、その他の記号で省略された情報を補足することができる<sup>7</sup>。このような情報の補足を、3つのパターンに分けて示す。

#### 3.1 音声言語と同時に情報の補足を行う場合

第一は、音声言語と同時に音声以外の形で情報を補う場合である。

(30) (= (10)) 早くも梅雨入りです。

この音声言語と同時に現れた映像上の文字は、(画面上方に)「九州 中国 四国地方」(画面下方に)「梅雨入り」である。この場合、音声言語で不足している「どこで」に関する情報を、文字で補っていることになる。

#### 3.2 文の一部を映像で置き換える場合

第二は、文の一部を映像で置き換える場合である。この方法がとられるのは、2節で述べた、述部が省略される単文に関してである。

- (31) (= (1)) a. 民主党の対案の提案に対し、与党は。  
b. 一方他の野党からは。  
c. 福田総理大臣は。

2.1 で述べたように、(31) では述部が完全に省略されている。(31a-c) の言語表現が現れた場面を比較すると、非常に類似したパターンがあることがわかる。(31c) を例に、この言語表現が現れた場面の映像、画面上の字幕 (および字幕が画面のどのあたりに現れたか)、音声の現れ方を表 1 に示す。表の右端の列は、録画した DVD の時間によるその場面のおおよその開始時刻を表す。



表 1

映像	画面上の字幕	音声	発話者	開始時刻
福田総理大臣 と記者たち	左上「民主党が対 案提出 新テロ対 策特措法は」	「福田総理大臣は。」	ナレーター <sup>8</sup>	21:07:32
福田総理大臣	左上「民主党が対 案提出 新テロ対 策特措法は」 右上「福田首相」 下部に音声と同じ 内容の字幕	「ちょっと拝見しましたが、 わかりませんね、よくわか らない。(以下、筆者による 略)」	福田総理大臣	21:07:34

(轟 2008:126)

ここでは次のようなパターンがある。①ナレーターの「○○は」(「福田総理大臣は」)というナレーションとともにその人物(福田総理大臣)が映像で登場する。②画面の右上にその人物が誰かを示す字幕(「福田首相」)が出る。同時にその人物(福田総理大臣)の発話が始まる。これとほとんど同じパターンで(31a,b)も出現している。つまり、(31)のような表現は、このニュース番組の中ですでにパターン化されていることがわかる。

このような例では、「福田総理大臣は『○○○』と述べました。」の下線部を、映像と実際の福田総理大臣の発話で置き換えているとみなすことができる。言い換えると、「福田総理大臣は」という音声言語と、福田総理大臣のインタビュー映像・音声とを合体させて、「福田総理大臣は『○○○』と述べました。」という文と同じ働きをさせようとしていることになる。

(31)は2007年に放送されたニュースに出現したものである。(31)に類似した2014年の例(32)に関し、この言語表現が現れた場面での映像、画面上の字幕、音声の現れ方を表2に示す。

(32) (= (3b)) 鈴木議員は自らの進退について。

表 2

映像	画面上の字幕	音声	発話者	開始時刻
鈴木議員	左上「一転謝罪で 自らの進退は」 右上「きょう」	「鈴木議員は自らの進退に ついて。」	ナレーター	21:06:07
鈴木議員	左上「一転謝罪で 自らの進退は」 右上(縦書き)「自 民党 鈴木章浩都議」 下方に発話が文字 で出る	(発話、内容は省略)	鈴木議員	21:06:12

表 2 を表 1 と比較すると、2014 年のニュースにおいても、2007 年の例とほぼ同じ情報の補足のパターンをとっていることが分かる。

### 3.3 同時には情報を補わない場合

音声言語で省略された情報をどう補足するかについての第三のパターンは、同時には情報を補わない場合である。このような場合の典型的な例では、どのような形でも情報を補わない。

(33) (= (8)) 700 万円払った部下もいました。

(33) の文は、このニュース項目の第一文である。この文を、続く第二文以降と共に (34) で記す。(映像で字幕が出た時点を文中に記しておく。)

(34) 700 万円払った部下もいました。神奈川県警察本部の警視が関与した疑いが  
(字幕「〓感商法、警視が部下の警察官を・・・」が画面に出る)  
出ている〓感商法事件で、この警視は、部下の警察官を〓感商法が行われていたサロンに勧誘したり、投資話を持ちかけて金を集めていたことがわかりました。」  
(「ニュースウォッチ 9」NHK、2007 年 12 月 21 日放送、轟 2008:125)

前節で述べたように、(34) の第一文「700 万円払った部下もいました。」は、要点の省略を含んでいる。その後出た字幕も省略を含んでいるが、第一文が出現した段階ではその字幕も出ていない。したがって、第一文が発話された時点では、情報はいかなる方法によっても補足されてはいない。ニュース項目の発話が進むにしたがって、音声言語や字幕などによって次第に情報が明らかになってくる。

一方、第一文と同時に字幕が出る場合もある。そのような場合、ある程度情報が補われるものの、要点が完全に表されてはいない。これは、次のような例である。

(35) (= (12)) むしゃくしゃしてやった。

この文と同時に、「建築中住宅」「連続放火事件」という字幕が出る。これにより、ある程度情報が補われるが、すべてが補われているわけではなく、第一文の段階では依然として要点の省略が存在する。ここでは、このような例も「同時には情報を補わない場合」として扱うことにする。(35) に関しては、次の節でさらに詳しく考察する。

この節では、音声言語に省略がある場合、省略された情報の補足をその他の記号でどのように行っているか(あるいは行っていないか)に関して、次のような 3 つのパターンを見た。

- ① 音声言語と同時に音声以外の形で情報を補う。
- ② 文の一部を映像で置き換える。
- ③ どのような形でも同時には情報を補わない。

③では、音声言語で省略された情報を同時には補わず、後になって徐々に明らかにする、という構造を取る。

次の節では、③の「どのような形でも同時には情報を補わない場合」を詳しく分析する。そして、ニュース項目の冒頭で省略された情報を後になって徐々に明らかにする方法として、音

声言語、字幕、映像、あるいはこれらの組み合わせをどのように用いているかを見る。

#### 4. ニュースにおける構造的な情報の補足

前節で述べたように、近年しばしば見られるニュースの構造のひとつは、音声言語で省略された情報が同時には補われず、後になって徐々に明らかにされるというものである。この節では、このような構造を分析し、ニュース項目の冒頭で省略された情報が様々な記号によってどのように明らかにされていくかを見る。

前節で触れた(35)は、ニュース項目の第一文である。(36)はこのニュース項目の全体、表3は映像・画面上の字幕・音声の出現のタイミングを示す<sup>10</sup>。

(36) むしゃくしゃしてやった。逮捕された22歳の男はこう供述しているということです。建築中の住宅を狙った東京多摩市の連続放火事件。男は一件目の事件の直前にガソリンを購入し、容器に入れていたことが警視庁への取材で分かりました。複数の現場からはガソリンや灯油が入った容器が見つかっていて、警視庁はいずれの事件でも油を準備して火をつけたと見て捜査しています。

(「ニュース7」NHK、2014年12月1日放送)

表3

映像	画面上の字幕	音声 (括弧中は発話者)
アナウンサー (女性) 向かって左隣にスクリーン スクリーン上に複数の写真を組み合わせた画像 (建築中の住宅や火事など)	スクリーン上 左上「建築中住宅」 右下「連続放火事件」 (アナウンサーの下に名前)	(アナウンサー)「むしゃくしゃしてやった。」
アナウンサー (女性) 向かって左隣にスクリーン スクリーン上に複数の写真を組み合わせた画像	スクリーン上 左上「建築中住宅」 右下「連続放火事件」 スクリーンの下 (アニメーション) 「逮捕の男 “むしゃくしゃしてやった” 供述」	(アナウンサー)「逮捕された22歳の男はこう供述しているということです。建築中の住宅を狙った東京多摩市の連続放火事件。」
アナウンサー (女性) 向かって左隣にスクリーン スクリーン上に複数の写真を組み合わせた画像	スクリーン上 左上「建築中住宅」 右下「連続放火事件」 スクリーンの下 (アニメーション) 「いずれの事件でも油を準備し放火か」	(アナウンサー)「男は一件目の事件の直前にガソリンを購入し、容器に入れていたことが警視庁への取材で分かりました。複数の現場からはガソリンや灯油が入った容器が見つかっていて、警視庁はいずれの事件でも油を準備して火をつけたと見て捜査しています。」

表 3 を見ると、前節で述べたように、第一文と同時に字幕が出ることによって、ある程度情報を補っているが、完全に補っているわけではなく、依然として要点の省略が存在する。続く発話によって要点が次第に明らかにされていく。同時に、発話と同内容の字幕が出ており、発話と字幕を使って要点を徐々に明らかにしていることがわかる。

別の例を見てみよう。(37) は、このニュース項目の第一文、(38) はこのニュース項目の全体、表 4 は映像・画面上の字幕・音声の出現のタイミングを示す。

- (37) (= (13)) 雪の中、暖房の効かない列車に 8 時間近く閉じ込められました。  
 (38) 雪の中、暖房の効かない列車に 8 時間近く閉じ込められました。今朝山形市と仙台市を結ぶ JR 仙山線で雪の影響で停電が発生し、およそ 300 人を乗せた快速列車が動けなくなりました。ようやく動き出したのはおよそ 8 時間後でした。  
 (「ニュース 7」NHK、2014 年 12 月 3 日放送)

表 4

映像	画面上の字幕	音声 (括弧中は発話者)
アナウンサー (男性) 向かって右隣にスクリーン スクリーン上に複数の写真を組み合わせた画像 (電車、車中、雪景色)	スクリーン上 左上「JR 仙山線」 右下「8 時間近く閉じ込め」	(アナウンサー)「雪の中、暖房の効かない列車に 8 時間近く閉じ込められました。」
アナウンサー (男性) 向かって右隣にスクリーン スクリーン上に複数の写真を組み合わせた画像	スクリーン上 左上「JR 仙山線」 右下「8 時間近く閉じ込め」 スクリーンの下 (アニメーション) 「車内に約 300 人 雪の影響で停電発生」	(アナウンサー)「今朝山形市と仙台市を結ぶ JR 仙山線で雪の影響で停電が発生し、およそ 300 人を乗せた快速列車が動けなくなりました。ようやく動き出したのはおよそ 8 時間後でした。」

この例でも、第一文と同時に字幕が出て場所の情報 (JR 仙山線) を補っているが、情報すべてを完全に補っているわけではなく、依然として要点の省略が存在する。続く発話によって要点が次第に明らかにされていっている。発話と同内容の字幕は発話とほぼ同時に出現している。

その他の例として、表 5、表 6 はそれぞれ、(39)、(40) の映像・画面上の字幕・音声の出現のタイミングを示す。

- (39) (= (21)) さあ、大型連休最終日の今日、大きな事故につながりかねないトラブルが起きました。ご覧の映像は、大分空港を離陸し、大阪に向かう日本航空の小型ジェット機。この旅客機が、大阪空港着陸直後にエンジン火災を起こしました。  
 (40) (= (23)) 名刺を交換するサラリーマンたち。臨んだのは、商談・・・ではなく、巨大地震を想定した訓練です。

表 5

映像	画面上の字幕	音声（括弧中は発話者）
アナウンサー（男性）	なし	（アナウンサー）「さあ、大型連休最終日の今日、大きな事故につながりかねないトラブルが起きました。」
アナウンサー（女性） 隣に空港の映像	なし	（アナウンサー）「ご覧の映像は、」
アナウンサー（女性） 隣に空港の映像	画面下方「日航機が着陸直後エンジン火災」	（アナウンサー）「大分空港を離陸し、大阪に向かう日本航空の小型ジェット機。この旅客機が、大阪空港着陸直後にエンジン火災を起こしました。」

(轟 2013:176)

表 6

映像	画面上の字幕	音声（括弧中は発話者）
名刺を交換するサラリーマンたち	左上「一刻も早い生産再開を、 南海トラフ想定で企業は・・・」	（アナウンサー）「名刺を交換するサラリーマンたち。臨んだのは、商談」
プレゼンテーションのスクリーン。次のような文字が映っている。 「サプライチェーンリスクを踏まえた 災害危機対応演習」	左上「一刻も早い生産再開を、 南海トラフ想定で企業は・・・」	（アナウンサー）「ではなく」
プレゼンテーションのスクリーンを含む会場全体	左上「一刻も早い生産再開を、 南海トラフ想定で企業は・・・」 左下「巨大地震 想定での訓練」	（アナウンサー）「巨大地震を想定した訓練です。」

(ibid.,176)

表 5、表 6 からわかるように、(39)、(40) のようなパターンを取るニュース項目では、音声言語の第一文で省略された情報が同時には補われず、後になって発話や字幕で徐々に明らかにされる、という構造を取っていることが分かる。

次に(41)を見てみよう。このニュース項目の冒頭で、アナウンサーの背後には横長のスクリーンがある。スクリーンは3つに区切られており、そこに画像や映像が映し出される。アナウンサーはその前を移動しながら(41)を発話している。以下の図 1 は、スクリーンおよびスクリーン上の字幕とアナウンサーの動きを表す。表 7 は(41)における映像・字幕・音声の出現のタイミングを示す。

(41) (= (29)) タオル産業が盛んな愛媛県今治市。佐賀県特産の陶磁器の有田焼。そして香川県名物のさぬきうどん。いずれも、地名や特産品の名前が中国で勝手に商標として出願されたり、登録されたりしたことから、地元の自治体などが登録の阻止や取り消しを求めるなどの対応を迫られました。無関係な第三者が海外で勝手に商品登録をするこうした悪意の商品出願。その対策などについて話し合う国際会議が今日から東京で始まりました。

図 1

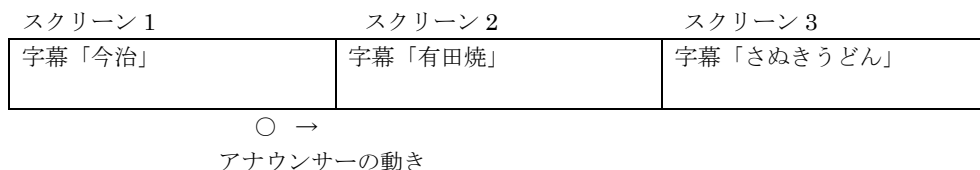


表 7

映像	画面上の字幕	音声（括弧中は発話者）
アナウンサー（男性） （スクリーン 1 と 2 の間） スクリーン 1 にタオルの画像 スクリーン 2 に磁器の画像	スクリーン 1 「今治」 スクリーン 2 「有田焼」	（アナウンサー）「タオル産業が盛んな愛媛県今治市。佐賀県特産の陶磁器の有田焼。」
アナウンサー （スクリーン 2 と 3 の間に移動） スクリーン 1 にタオルの画像 スクリーン 2 に磁器の画像 スクリーン 3 にうどんの画像	スクリーン 1 「今治」 スクリーン 2 「有田焼」 スクリーン 3 「さぬきうどん」 スクリーンの下 「地名・特産品の名前が中国で勝手に商標出願や登録される」	（アナウンサー）「そして香川県名物のさぬきうどん。いずれも、地名や特産品の名前が中国で勝手に商標として出願されたり、登録されたりしたことから、」
アナウンサー （スクリーン 2 と 3 の間） スクリーン 1 にタオルの画像 スクリーン 2 に磁器の画像 スクリーン 3 にうどんの画像	スクリーン 1 「今治」 スクリーン 2 「有田焼」 スクリーン 3 「さぬきうどん」 スクリーンの下 「地元自治体など対応迫られる」	（アナウンサー）「地元の自治体などが登録の阻止や取り消しを求めるなどの対応を迫られました。」
アナウンサー （スクリーン 2 と 3 の間） スクリーン 3 に会議の映像	スクリーン 3 スクリーンの下（アニメーション） 「どう防ぐ『悪意の商標出願』」	（アナウンサー）「無関係な第三者が海外で勝手に商品登録をするこうした悪意の商品出願。その対策などについて話し合う国際会議が今日から東京で始まりました。」

表7を見ると、発話と同時に出る字幕は発話の内容を補うものではなく、発話とほぼ同内容のものであることが分かる。第一文においても、第二文以降で要点が徐々に明らかにされていく際も、そうである。字幕は発話に先行して要点を明らかにするものではなく、発話とほぼ同時に使われていることが分かる。

この節では、ニュース項目の冒頭で音声言語に省略があり、省略された情報を同時には補わず、後になって徐々に明らかにする場合を見た。徐々に明らかにする方法としては、音声言語の形で、字幕で、映像で、あるいはこれらの組み合わせで、という方法がある。これらの組み合わせを用いる場合、いずれかの記号が先行することはあまりなく、ほぼ同時にそれらの記号を提示することが多いようであるが、実際に多いかどうかを結論付けるにはさらに調査する必要がある。

次の節では、ニュースにおけるこのような要点の省略と後置の現象がどのように始まったかを考察するため、この現象に関連して比較的古いニュースの例を見ることにする。

## 5. 過去のニュースにおける省略と後置

この節では、過去のニュース番組と2014年のニュース番組で、省略と後置の出現および情報の補われ方を見る。

過去に放送されたニュースを見ると、単文の述部や必須の要素を省くような例は近年見られるようになったものであるが、談話の構造としての要点後置はかなり古くからあることがわかる。このことを、1974年に放送されたニュースを例に見る。1974年4月1日に放送されたNHK「ニュースセンター9時」では、単文の述部や必須の要素を省くような例は出現していない。しかし、談話の構造としての要点後置は複数回見られる。そのうちの一つが、以下のようなものである。

- (42) さて、イギリス人ほどではありませんけれども、私たち日本人も季節の移り変わりというものに極めて敏感です。つい4日前に季節はずれの春の雪に見舞われました東京は、今日はまるでうって変わった5月上旬のぽかぽか陽気です。どうも少しおかしいと、気象が尋常ではないというのが茶の間の話題を呼んでおります。ちょっとこの図をご覧くださいと思うんです。これはアメリカの衛星ニンバス5号がマイクロウェーブを使って撮影しました南極大陸の写真です。最初のこの写真を撮ってからわずか1か月半後に撮影したこの写真ではこれだけの変化が起きておりまして、別の言葉で言えばこの一月半の間にこの分だけの氷がなくなってしまったということになります。面積にしますと日本のおよそ8倍の氷の大陸が消えて解けてしまった<sup>11</sup>ということになるわけです。まあ、こうした一つのことが象徴するように、世界の気象の異常ぶりというものが目立つわけですがけれども、これについて、この気象の異常ぶりを丹念に調べておりました気象庁は、今日、異常気象白書というものを発表しました。」

(「ニュースセンター9時」NHK、1974年4月1日放送、ibid.,179)

(42) には、単文の述部や必須の要素(文の項や5W1H)を省略した文は含まれていない。しかし、談話の構造としてみると、何のニュースなのかがなかなか分からないような構造になっている。上に挙げた部分の後には、世界各地からの気象に関する報告が続く、最後まで見るとこのニュースは全体として「異常な」気象に関するニュースであったことが分かる。この当時のニュースは、画面上に文字などはあまり出ず、上のニュースでも、何のニュースなのかを画面上の文字で補足するというのではない。

このような例が1974年のニュースにすでに見られる。このことから、「要点の後置・省略」

は談話の構造的な要点後置から始まったと考えられる。

1974年の(42)と2014年の(41)を比較してみよう。ともに、談話の構造として、話が進むにつれて何のニュースなのかを徐々に明らかにするという構造になっている。徐々に明らかにする方法としては、1974年の例では、主に音声言語を用いている。これに対し、2014年の例では、音声言語のほか、画像、映像、字幕など多様な記号を用いている。

これらの点から、「要点の後置・省略」は、歴史的に見て次のような段階を踏んで発展していったと考えられる。

1. 談話の構造として要点を後置する。すなわち、重要な点を最初には述べず、後のほうで徐々に明らかにしていく（主に音声言語）。
2. 談話の構造として要点を後置する。要点を、音声言語だけでなく多様な記号を用いて明らかにしていく。
3. 談話の第一文で、文法的に必須の要素を省略した文を用いる。
4. 談話の第一文以外でも、文法的に必須の要素を省略した文を用いる。

「要点の後置・省略」が実際にこのような過程をたどって発展したかどうかを確認するには、より多くの歴史的な例を分析する必要がある。しかし少なくとも、「要点の後置・省略」が談話の構造としての要点後置から始まったことは間違いないと思われる。

## 6. 結論

本論文では、文の要点や必須の要素を後ろのほうに動かしたり省略したりする現象である「要点の後置・省略」、および省略された情報を補足する方法について考察した。そして、「要点の後置・省略」が歴史的にどのように発展したとみられるかを示した。

「要点の後置・省略」には、単文で、統語的に必須の要素やいわゆる5W1Hの一部が省略されている場合がある。また、談話の構造として、要点が後ろに動かされているものがある。このような談話では、多くの場合、第一文が要点の省略を含む文となっている。

一方、ニュースの音声言語に省略がある場合、省略された情報を音声言語以外の記号で補足しているかどうかに関して、3つのパターンがある。それは、①音声言語と同時に出現する他の形式の記号で情報を補う場合、②文の一部を映像などで置き換える場合、③どのような形でも同時には情報を補わない場合である。このうち、③では、第一文で省略された情報が同時には補われず、後になって徐々に明らかにされる、という構造を取っている。この場合、省略された情報は、様々な記号形式で明らかにされる。

このような「要点の後置・省略」のうち、談話の構造としての要点後置はかなり古くから見られる。このような例での情報の補い方は、上の③におけるものと類似し、冒頭で省略された情報がその後徐々に明らかにされる。このような談話の構造的な要点後置から始まり、「要点の後置・省略」は単文の必須の要素を省くまでに進んでいったとみられる。



## 註

- 1 本論文中のニュースの例は、大部分 NHK で放送されたものであり、一部が民間放送で放送されたものである。NHK の分類では、放送するプログラム全体を、「ニュース」とそれ以外のプログラムに二分し、「ニュース」以外のプログラムを「番組」としているが、本論文では、「番組」という語を「テレビで放送されるプログラム」という一般的な意味で用い、ニュースを扱っているプログラムを「ニュース番組」と呼ぶことにする。
- 2 本論文で例として挙げるニュースの言語例は、音声言語の場合、筆者が聴きとって文字にしたものであり、漢字の使用や仮名遣い、読点・句点などは筆者の判断による。ただし、画面上に音声言語と同内容の文字が出ることがあれば、それらを参考にした。ニュース中に登場する人物や団体などの呼称は、すべて放送されたそのままであり、したがってニュース放送時点のものである。
- 3 『『奥さん』という語は[[X の]奥さん]のようにパラメータ X を要求する非飽和名詞』（西山 2011:176）
- 4 (9) は疑問文の形式をとっているが、この形式も近年のニュースで顕著に見られるものである。轟 (2008) を参照されたい。
- 5 行方不明の船長の名前の漢字は、「ニュースウォッチ 9」の画面の字幕では「義澤宏志さん」となっていたが、この新聞記事中では「義沢宏志さん」となっているので、そのままの表記にしてある。
- 6 (29)には、冒頭をはじめ、いわゆる「体言止め」が複数回用いられているが、これも近年のニュースでしばしば見られる現象である。轟 (2007) を参照されたい。
- 7 ニュースを構成する記号のうち、映像の意義について、小田原 (2008) は、「ニュースの映像は、受け手がニュースの理解、意味づけをする際に、きわめて重要な判断材料となる場合もある、ということだろう。」と述べている。
- 8 ニュース番組においては、誰がそのニュース項目を発話しているか明示される場合もあるが、誰が発話しているか分からない場合もある。轟 (2008) はこれを「報告者の匿名性」と呼んでいる。本論文では、アナウンサーやキャスターなどニュースを伝える人を総称して「ナレーター」と呼ぶことにする。特に、話者が誰かがその時点で不明確である場合に「ナレーター」という呼称を用いることにする。
- 9 画面上の字幕は、しばしば、アニメーション効果を伴って出る。(34) においてもそうである。このような場合、字幕の出始めから字幕が完全に読めるようになるまで時間の幅がある。(34) では、字幕がほぼ完全に読めるようになった時点でのその内容を示してある。
- 10 この例では、画面中のアナウンサーの横にスクリーンがあり、そのスクリーン上にもスクリーンの外の画面上にも字幕が出る。これらの字幕やスクリーン上の画像が情報を補うために使われている。この例および類似の例での映像や字幕の出方を示す表においては、字幕や画像が画面中のスクリーン上に出たかその外に出たかを示している。
- 11 「消えて解けてしまった」という表現は、原文そのままである。

## 参考文献

- Chomsky, Noam (1981) *Lectures on Government and Binding*, Foris.
- 柏崎敏 (2013) 「どう書くか 沈黙の 1 年」朝日新聞 (石川) 2013 年 11 月 30 日 21 面。
- 中村捷、金子義明、菊地朗 (1989) 『生成文法の基礎——原理とパラミターのアプローチ』研究社。
- 西山佑司 (2011) 「曖昧表現からことばの科学を垣間見る」大津由紀雄編『ことばワークショップ——言語を再発見する』開拓社。
- 小田原敏 (2008) 「映像を読み解く——映像言語分析の試み」小玉美意子編『テレビニュースの解剖学——映像時代のメディア・リテラシー』新曜社、121-135。

- 轟 里香 (2007) 「映像メディアで使用される言語の変化——英語学習者に対する影響」『北陸大学紀要』第 31 号、125-135。
- 轟 里香 (2008) 「ニュース番組で用いられる言語の変化について」『北陸大学紀要』第 32 号、121-133。
- 轟 里香 (2010) 「ニュース番組の相違が言語に及ぼす影響」『北陸大学紀要』、第 34 号、99-109。
- 轟 里香 (2011) 「ニュースの内容による言語的相違」『北陸大学紀要』第 35 号、1-12。
- 轟 里香 (2013) 「ニュースにおける省略と後置」『北陸大学紀要』第 37 号、169-181。